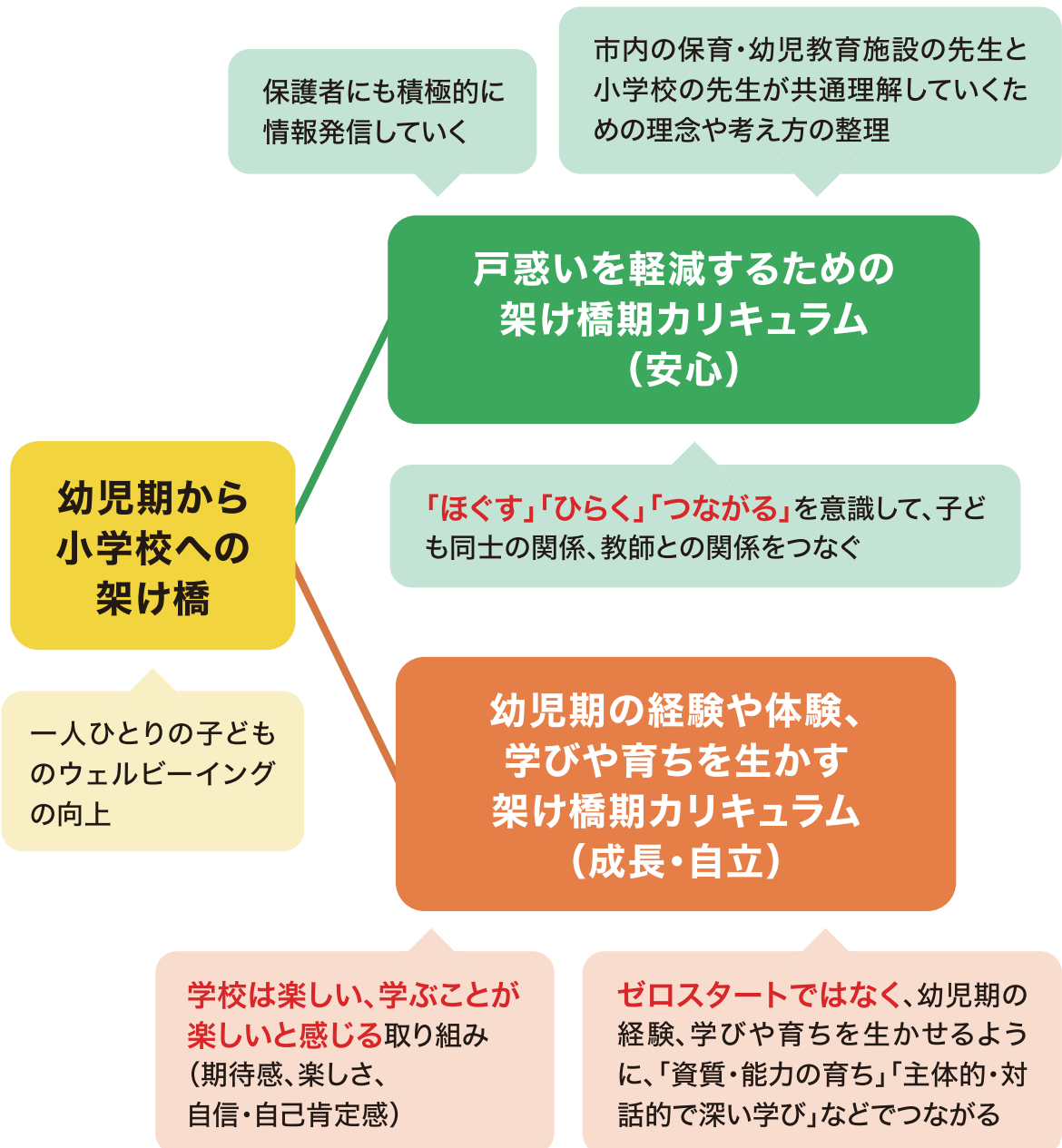


箕面市架け橋期カリキュラムの特徴と意義

大阪総合保育大学 教授 瀧川 光治

1. 箕面市の架け橋期カリキュラムの特徴

箕面市の架け橋期カリキュラムは、さまざまな支援や配慮を必要とする子どもも含めて、一人ひとりの子どもの育ちや経験が、各保育・幼児教育施設やご家庭から市内の小学校へつながり、育ちのバトンを安心してつないでいけるようにと願いを込めて作成されています。幼児期から小学校以降へ一人ひとりの子どもにとってウェルビーイング（幸せな気持ちを感じながら生活している状態）を向上させ、切れ目が生まれないようにするために作成されたものです。



箕面市の架け橋期カリキュラム開発検討会議には、3名の保護者も委員として参加し、保護者の視点から意見を出してもらうといった特色がありました。

その中で、架け橋期の幼児・児童の保護者の戸惑いや分からなさ、期待感を知り、積極的な情報発信の必要性や情報発信の内容や仕方などについても考えていくことが大切だと感じました。保育・幼児教育センターや教育委員会事務局からの発信だけでなく、市内の各保育・幼児教育施設と各小学校からの発信も大事にしていきたいところです。

2. 架け橋期の2年間で大切にしたいこと

ここで義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間の架け橋期に大切にしたい理念や考えを整理しておきます。

1つは、「はじめの100か月の育ちビジョン」(こども家庭庁)にも示されているように、「子どもの権利や尊厳を尊重する」「安心と挑戦の循環」ということです。保育・幼児教育施設での日々の保育・教育、小学校での日々の教育活動の中では、「子どもの権利」「子どもの主体性(権利主体としての子ども)」を意識して関わることが求められます。そのためにも、「子どもの思いや願いを尊重する」(=子どもの心の声を聴く)といった関わりや機会を積極的につくっていくことが大切です。「安心と挑戦の循環」の視点からは、子どもは安心の基盤があると、いろいろなことを“やってみたい!”と意欲や好奇心が発揮されます。その中でさまざまな経験が積み重なることで、より豊かな育ちにつながっていきます。「やってみたい!」という学びに向かう力は、学習の基盤となるものです。

幼児期はやってみたいという気持ちを発揮しながら、自発的な活動としての遊びを通して育っていくことを大切に、小学校1年生では、その学びに向かう力を引き継いで、「安心・成長・自立の過程」(スタートカリキュラム スタートブック)を意識することが求められます。そのように、「学びに向かう力」をつないでいくことが、1年生当初からの「主体的・対話的で深い学び」にもつながっていきます。

そしてもう1つ大切にしたいのが「子ども一人ひとりの自信や自己肯定感の育ちを支える・つなぐ」ということです。「安心と挑戦の循環」の中で子どもが主体的に活動することを通して、自分で何かを成し遂げて生まれる自信や他者から認められて生まれる自信が生まれてきます。このような日々のささやかな自信の積み重ねが、ありのままの自分を肯定的に捉える「自己肯定感」や、自分も一人の人間として大切にされているという「自己存在感」の育ちにつながってきます。このような育ちを支えることは、小学校以上においても『生徒指導提要』(文部科学省、令和4年改訂)に示されていることと同じです。

そのため、保育・幼児教育施設、小学校だけでなく、家庭でも「子どもの権利や尊厳の尊重」「安心と挑戦の循環」「子ども一人ひとりの自信や自己肯定感の育ちを支える・つなぐ」ということを意識していただきたいと願っています。

3. 認識・捉え方のアップデートを！

幼保小の交流・連携から幼保小の協働による接続へと変化してきている幼稚園・保育所・認定こども園と小学校との連携や接続については、これまでも各自治体で「子ども同士の交流活動」「教職員の交流や情報交換」のみならず、「接続期カリキュラムづくり」などが行われてきました。たとえば、小学校の生活科の授業に、幼児が参加したりするなどの幼児と小学生の交流の機会があったり、地域の小学校に幼児が見学に行き、小学校のことを知る機会をもつなど幼児期の子どもたちが小学校生活を安心して送れるようにしていく取り組みがあります。いわゆる「小1プロブレム」「段差の解消」のための取り組みとして実施されてきましたが、市内の幼稚園・保育所・認定こども園のすべて（公立・私立・民間を問わず）の取り組みになっていなかったのが実情でした。

架け橋プログラムは、小学校との架け橋だけでなく、市内保育・幼児教育施設の「横のつながり」（横の架け橋）もつくっていくことが大切です。文部科学省の「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」という資料によると、「子どもに関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上ですべての子どもに学びや生活の基盤を育むことをめざすもの」と明記されています。

すなわち、架け橋プログラムとは、小学校と保育・幼児教育施設の協働の取り組みとして接続のためのカリキュラムを作るだけではなく、子ども同士の交流、教職員・保育者の交流、さらに架け橋期に関わる事例集の作成などを通して、学びや生活の基盤を育みながら、幼児期と小学校期をつなぐことを意図したものです。

架け橋期カリキュラムを直接的に活用するのは、箕面市内の各保育・幼児教育施設・小学校の保育現場・学校現場の先生がたです。一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上のために、ぜひ育ちのバトンを安心してつないでいけるように、積極的にこのカリキュラムを活用していただくことを願っております。そして、実際に使ってみる中で理念や考え方、実践が深まり、このカリキュラムの改訂やバージョンアップを図っていただきたいと思います。